

NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

● 巻頭エッセイ「リーダーを考える」..... 1	● 第 19 回勉強会、第 20 回勉強会..... 3
● 第 21 回「英語の教え方教室」勉強会案内..... 1	● 授業の玉手箱「聞く力」..... 4
● 「英語の教え方教室」勉強会報告..... 2	● 書籍紹介『開国と英和辞書一評伝・堀達之助』..... 4
● 第 17 回勉強会、第 18 回勉強会..... 2	● 教員免許状更新講習 3 案内..... 4

巻頭エッセイ

リーダーを考える

中垣 芳隆

離合集散、春秋戦国時代さながらに、多数の党の乱立、当選優先のごとく党派を渡り歩く候補者が散見されるなど、喫緊の課題山積の我が国の政治の先行きに少なからず不安を抱かせた衆議院選挙も終わりました。

その陰に隠れていましたが、教育の分野では、昨年末に TIMSS の結果を報じる記事がありました。小学校4年生の算数・理科の点数が上昇したことを受けて文科省参事官は「新学習指導要領など学力改善に関する取り組みが少しずつ成果を上げてきているのではないかと自信を示したとありましたが、「ゆとり教育」の下で学校生活を送らざるを得なかった世代に対しての一言の言及もないというのはいかがなものでしょうか？ある文部官僚がかつて、「政治と世論の顔色を気にしながら帳尻を合わせるようにその場その場で絵を描いている」と嘆いたそうですが、その典型を見る思いがします。

この方を振り返ってみますと、学校組織の機能化を図るための新しい職の設置、給与と連動する教員評価、免許更新制、校長がリーダーシップを発揮しやすいようにと、職員会議の位置づけを始めとする、管理職の権限強化施策など、政府はさまざまな審議会をつくり矢継ぎばやに「教育改革」に関わる施策を打ち出してきました。しかし、10年余りを経て、日本の教育は良くなったと言えるのでしょうか？

現職の校長先生方と話しても、「学校が窮屈になりました。」「先生方に余裕がなくなったように思います。」との声が聞かれます。競争原理の導入、短期的な評価に晒され、机の上で処理する事務作業が増加し、先生方が全力で子どもに向き合えなくなっている側面が伺えます。

管理職への昇任の状況についてみれば、東京都では管理職の多忙さが教諭の管理職離れに繋がっている結果、主幹教諭が合格すればすぐに副校長に任用する選考を開始したが、受験者数は合格予定者数を大きく下回り、合格倍率は、ほぼ一倍の状態が続いており、管理職の質の低下を懸念する声が高まっているとの記事が見あたります。

校長のリーダーシップが声高に叫ばれて久しくなりますが、どうも行政が求めてきたのはリーダーというよりは優秀なマネージャーではなかったのかとの思いがします。学校は「生きもの」とよく言われます。校長の器量によって元気にもなれば沈滞もします。

リーダーシップについて語られる時、よく「リーダーとしての器の大きさが組織の盛衰を決める」と言われますが、人を率いていく力の大きい人が率いる組織ほど、人々は可能性を花開かせ、組織もますます隆盛していきます。一方、リーダーとしての天井が低ければ「天井の法則」と言われるように、組織の成長も頭打ちとなります。

では、リーダーに望まれる資質とはどのようなものでしょうか。温故知新と言う言葉に従い、まず、故きをたずねてみますと、我が国の戦国武将にもつばら読まれた「孫子」には、将の将たる人間は「智」、「信」、「仁」、「勇」、「厳」を備えるべしとあります。

「智」…今風に言えば世の中の動きを先んじて読み取る力。

「信」…心正しく偽りがなく、部下の信頼を集めること。

「仁」…思いやり、労り。これは人間としての一番大事な、人を慈しむ心。

「勇」…ことに臨んでよく忍耐し、危険を恐れず為すべきことを行う力。

「厳」…けじめをはっきりする厳しさのこと。

次に、新しいところで、「世界一のメンター」あるいは「リーダーのリーダー」として名高いジョン・C・マクスウェルの著書から引用してみます。

「時流を察知する力」…幅広い視野で10年単位で将来を見通す力。

「知識・情報」…将来に備えて事実関係や今後の動向を把握し、手を打つべきタイミング、ビジョンを考える力。

「人を惹きつける人柄」…人徳ほど説得力のあるものはない。

「良好な人間関係が築ける」…「適切な人たち」と「適切な関係」を築けること。

「直感力」…部下のやる気、組織のエネルギーを機敏に察知し、バランスを取りながら人を動かす。

「胆力がある」…部下を信頼して仕事をまかす。最後の責任は自分がかかる。

「課題と格闘してきた経験と成功体験」…この人についていっていいのか、を判断するとき、それまでの実績ほど頼りになるものはない。成功を重ねる度に「その人の発する言葉」に重みが増し、信頼が高まる。こうしてみますと、リーダーに求められる資質は、洋の東西、時代・時空を超えて不変のようです。

超高齢社会の中で様々な課題を抱える我が国の未来を担うことも達の教育について、新しい政権の下で、今度こそ国家百年の大計にふさわしい、将来を見据えた確固たる文教政策を期待したいものです。さらには、こども達の教育に責任を持ち奮闘される先生方と学校組織を預かっておられる校長先生がたを始めとする管理職の方々には、真のリーダーシップを備えられ、教職員にさまざまな甲斐を実感させていただくことを心から望むものです。

第 21 回「英語の教え方教室」勉強会 (案内)

平成 25 年 2 月 9 日 (土) 14:00 ~ 17:00

■「私の授業への挑戦」～スローラーナーにいかにか寄り添うか～
滋賀県立伊香高等学校 坂本 美佳 教諭

■「私が試みる指導法」～自己表現と学習者心理の理解に重点を置いた指導～
三重県立名張高等学校 岡本 泰 教諭

滋賀県の新進気鋭の坂本先生と三重県の経年豊かな岡本先生に本年度を締めくくる実践指導紹介をお願いしました。坂本先生には持ち前の情熱で日々実践されている英語授業の成果を失敗や成功を交えて、岡本先生にはこれまで実践されてきた自己表現活動についてお話いただきます。





「英語の教え方教室」勉強会

報告：中井弘一

- 第 17 回：英語特区における「英語活動」授業の取り組み
- 第 18 回：大阪女学院大学 教職フィールドワーク 課題研究発表
- 第 19 回：クイーンズランド大学での研修で学んだこと Student-centered の授業展開における効果的実践方法について
- 第 20 回：中高接続の観点からみた、四技能をバランスよく伸ばす指導とは

第 17 回「英語の教え方教室」勉強会
平成 24 年 7 月 14 日 (土)

「英語特区における「英語活動」授業の取り組み」
大阪教育大学付属池田高等学校講師 小野木 ゆみ



祇園祭り宵山が始まったこの日、24 名の先生や学生の参加を得た。小野木先生は、教員として活躍されていたが、ご主人の転勤で退職。その間に大学院を修了された。その後、息子さんが大きくなられ、やっと落ち着いた時、池田市の英語教育特区で非常勤講師の仕事を得られた。たまっていたマグマが爆発するかのようになり、渋谷中学校で様々な活動をされた様子を伺った。

池田市教委は、特区として中学校英語活動を「英会話」を中心に以下の目標達成を掲げた。

1. 聞くこと、話すことに重点を置いた英語によるコミュニケーション能力を育成する。
2. 書くことも含め、英語による自己表現活動を通して、他者と自分をより深く理解する力を養う。
3. 外国の習慣 文化に触れ、国際理解への意欲を高めるとともに、自分の住む地域への関心を深める。

小野木先生は、渋谷中学校でのこの「英語活動」を任された。指導の手立てとしては以下のように行っているとそれぞれ説明された。

1. Content-based instruction
 - ・ 3 時間の授業で使っている教科書 New Crown の内容を発展させるものを扱い生徒の教材内容への理解を深める。
 - ・ 他教科で学んでいる単元内容を「英語活動」で扱う素材として取り入れる。
2. Cooperative learning(協同学習)
 - ・ 班活動、ペアワークを行うことで、一層高い成果が生まれることを考え、班分け・ペアワーク分けには細心の注意を払ったとのことである。
3. Authentic situations 実際に英語を使う場を提供する。
4. Essay writing の指導

これらの手立てについて、参加者と話し合いながら理解を深めた。Content-based learning では、トピックが優先されて、生徒が関心を持つ内容を主体に行うことができる。

Cooperative learning では、参加者の先生もほとんど、ペア活動・班活動を取り入れられているとのことであった。取り入れる目的としては、「寝る生徒がいなくなる」「協力し合いながらやる」などの意見があった。

Authentic situations については、生徒が実際に使う場面、機会を与えることが、現実感を与えると同時に生徒のモチベーションを高めることにつながるとのことである。いま、文部科学省は、グローバル化に対応するために「思考力・判断力・表現力」の育成を図る指導を強く打ち出している。こうした力の育成は、教科書の訳読を通して生まれるものではなく、タスクを与えそれをこなす中で培われるものである。したがって言語の使用を促す現実的な状況や実際の場面設定で、どのようにそのタスク(課題) を達成するのかを思考させ、判断させていくことが好ましい。そのために、「思考力・判断力・表現力」の評価にパフォーマンス評価を取り入れていることが小学校で増えている。今後、中学校や高等学校においても、can-do 評価の導入とともに検討されるべきことになるであろう。

Essay writing では、トピックセンテンス、支持文、結論文、を書くなどパラグラフ・ライティングを指導しているとのことであった。

たくさんの生徒の作品を持参していただいた小野木先生は、実際のものやわかりやすい具体的な Realia を授業に充分用意し、臨場感を持たせることを心がけておられた。



第 18 回「英語の教え方教室」勉強会
平成 24 年 10 月 20 日 (土)

「大阪女学院大学 教職フィールドワーク 課題研究発表」

学生 横田朋子、屋麻戸周子、樋口綾香、中尾実可、川野潤美、高井楓

異文化理解の感性を磨くと共に教材を作成する視野を広げること、そして英国の中学校 (Manor School) の授業を 1 日観察し、そこでの生徒にプレゼンを行うことを通して、将来の教員としての資質能力の基礎力を育成することを目的とした「教職フィールドワーク (英国) 2012」での活動報告を多数の参加者 (32 名) のもとに学生が行った。

「街角観察」

学生達は印象に残ったこととして、監視 (防犯) カメラやタクシー・2 階建てバスの様子、英国で見るアジアなどのことについて述べた。特に監視カメラの多さには驚いたようであった。

「創作教材」

様々な素材から教材を創り出す体験をさせ、今後の教材開発の視野を広げざるを得ないとしていた。資料として、こちらで英語のチェックを入れずに冊子印刷したので、英文に誤りが少なからず見られた。この点は学生の英語教材を作成する意識での学生の甘さである。しかしながら、本研修旅行は教材作成への感性を磨く第一歩となった。

「授業観察」

Learning Support Class (特別支援クラス)

- ・ 教材の工夫
 - ＊ 実験 (主題に沿いつつ、生徒を引きつけている)
 - ＊ 身の回りのものを使って勉強する
 - ＊ 生徒一人ひとりに合わせて、レベルの違うものを用意している
- ・ PPT の使用度の割合の多さ
 - ＊ Math 以外のクラスは PPT を使って、授業を進めていた
 - ＊ PPT の使用時間と教材の時間の割合は偏りがなかった
- ・ 生徒へのサポートの仕方
 - ＊ 先生が 2 人以上で授業をする
 - ＊ 一人一人の生徒の考えを受け止め、シェアする
 - ＊ 生徒の気持ちや状態を受け止め、その状態に合わせてながら、授業を進める

< 普通クラス >

< 生徒の学習態度の特徴 >

- すぐく活発的で笑顔がいっぱい
- ほとんどの生徒が手を挙げて、発言する
- 小さいホワイト・ボードを使っている
- 一切寝ない。人の話をちゃんと聴く
- ノートを取る時には、ボールペンだけを使っている
- 何事にもすぐく集中する
- 勉強する事が好き
- 前向きに取り組む

< 先生の指導の特徴 >

- すぐく活発で、笑顔を絶やさない
 - 生徒に沢山質問をして、生徒に考えを求める
 - 怒る時も筋道を立てながらフォローして、短時間で叱る
 - パワーポイントを使った授業が多い
 - 先生からの説明時間が短く、練習問題を沢山させる
 - 教科書は教室のみで使用、家ではバーチャルテキスト (PC)
 - どのクラスにも共通しているのが、積極的であるということ
 - 自分から学ぼうとする姿勢
 - 間違えてもいいから発表する
 - 学びたいという思いの強さがノートの取り方や宿題の取り組みに出ている。
- など、学生が報告した。



第 19 回「英語の教え方教室」勉強会
平成 24 年 11 月 17 日(土)

「クイーンズランド大学での研修で学んだこと
— Student-centered の授業展開における効果的実践方法について」
大阪府立豊中高等学校教諭 北村浩子



今回の発表は、百十数ページに及ぶ現地資料をもとに、次の 5 つの項目を取り上げてお話しいただいた。

1. Pair Work and Group Work
2. Classroom Language
3. Teaching Vocabulary & Vocabulary Activities
4. Pronunciation Stations
5. Checking Students' Understanding of New language

まず、Pair Work and Group Work について、ペア・グループ活動を行う際に見られる、生徒に関する問題点と教員の問題点チェックシートを参照しながら、それぞれどのような解決方法があるかを提示されている Solution リストから選んで考え、改善につなげるというものであった。

- たとえば、生徒が有する課題のチェック項目は、
1. Some students speak L1 if I put them in groups.
 2. Different groups finish the task at different times.
 3. My students get bored working with the students in their row and I can't move the furniture.
 4. Good students do all the work & lazy students do nothing.
 5. My students are confused by group activities.

ペア・グループ活動をするのはなぜかを参加者と話すと、「話す機会が増える」「異なる考えを知ることができる」「学習する主体が生徒にある」「affective filter(情意フィルター)が低くなり、学習に安心感を持つ」など回答があった。資料には、“Learning English in my class is like going to a dance. We move around and dance together in pairs or groups. It may look unorganized, but we all know the steps and everybody is happy to do what they can and learn new dances!” と。

次に、CLASSROOM LANGUAGE について、授業で母国語と英語をどう使い分けているかを、チェックシートで参加者が自己チェックをした。チェック項目は、“Chatting to students informally before or after the lesson” “Checking attendance” “Asking questions about a text to check understanding” “Correcting errors” “Disciplining students” “Praising or encouraging students” などであった。英語で授業をやる意味や目的を参加者に尋ねたところ、「英語の授業であることを認識させる」「英語の雰囲気を生み出す」等の意見が出た。学習指導要領のねらいは先生が一人しゃべる英語でなく、生徒の言語活動を原則英語で行うである。input のみで output がなければ、生徒のコミュニケーション能力が開発されるわけがない。input も多量に与えないと output に結びつかない。

「語彙」と「発音」について話していただいた後、Checking Students' Understanding of New language について話された。

Make sure you don't focus on form and forget about meaning! とした上で、Meaning check Questions (MCQs) とは、A set of short simple questions with short simple answers. The learners' answers to these questions tell you whether they have understood the essential elements of the meaning of the item in the current context.

- a. Analyse the meaning of the item (grammar or vocabulary) into its Essential Elements of Meaning (EEMs) as used in this context.
- b. Reduce the target grammar/vocabulary item to 2-4 simple statements, which describes the Essential Elements of Meaning of that item in this context.

文法にしろ、語彙にしろ、リーディングにしろ、指導のエッセンスと思われるものを、教師がしっかり考えた上で、生徒の理解力などを育成する発問をするなど、学ぶべきことは何か、どう説明するのが良いのかなどじっくり考えないといけないということであった。



第 20 回「英語の教え方教室」勉強会
平成 24 年 12 月 8 日(土)

「中高接続の観点からみた、四技能をバランスよく伸ばす指導とは」
滋賀県立八幡高等学校教諭 中西 勝弘



中西先生に、中高接続の観点からみた四技能をバランスよく伸ばす指導についてお話しいただいた。中西先生を慕って、滋賀県の若手教員が応援に駆けつけておられた。今回、6名の初参加者を含め総勢 23 名で有意義な時間を過ごした。

最初に基本データとして、「英語は好きな教科である」に対する全学年生徒(750名)のアンケート結果を示された。各学年とも4月の45%~50%から10月には10ポイント前後増加していた。右肩上がり要因を、ALT参加のワクワク感のある授業や校内行事を取り入れたことではないかと回答され、日々の授業の構造改善などの内的要因よりも、外的要因の影響力を挙げられた。「英語を好きにさせるには、ただおもしろいというのではだめで、知的好奇心を持たせる工夫が必要だ」と参加者から意見があった。知的好奇心を引き起こす方法としては、「生徒が持っている固定概念や先入観による予想と異なる情報を提供すること、それによって、そうなのかと気づかせる」「物事の法則を示してなぜそのようになるのかの原理や考え方を理解させた上で、それでも例外がある複雑さに気づかせる」「いくつかのもらしい選択肢や対立する選択肢を提示し、それについて考えさせる」などを試みるのが有効と言われていると司会から話した。

次に、中西先生がご自身の授業で指導キーワードとされている“visualize”について、またそれを意識した英語Ⅱの展開を話された。

- ① Oral Introduction & Brainstorming<LS>
 - ② Listening(CD)<L>
 - ③ Chorus Reading<LRS>
 - ④ Self Reading(Students sit down after reading aloud)<RS>
 - ⑤ Completion of Translation<RW> (Translation worksheet)
 - ⑥ Summary (Filling in blanks and read)<RWS>
 - ⑦ Pick up grammatical points <RW>
 - ⑧ Checking Answers (Preparatory worksheet)<RW>
 - ⑨ Timed Reading<S>
 - ⑩ Columnar Reading(pair work)<S>
- ※ Overlapping, Shadowing が授業の展開手順である。

“visualize”を大切に英文のイメージ理解を深め、重要部分などを確認した上で、定着度を深めるため言語材料や英語特有の言い回しなどの箇所を空欄にした和訳プリントを用いるとのことであった。上記の展開で行う授業を通して、四技能をバランスよく伸ばす意味を生徒が理解してくれ、ハンコポイント等がなくても、授業中の挙手が増えた。リピートの声が大きくなった。和訳に時間をかけないため、文構造を自分で納得のいくまで確認し、机間指導中に質問する生徒が増えた。なぜか、“Visualize”と口癖のように言う生徒もいる(笑)とのことで、“visualize”はクラスの合い言葉になっているとのことであった。

- また、ご自身の教育理念としての心構え 10 箇条を話された。
- ①授業のはじめにペアで、英語で雑談をさせたり、洋楽をかけたたりする。
 - ②一つの問いを、一人の生徒が完全に答える必要はない。隣の生徒にバトンタッチさせても OK とする。
 - ③生徒の回答は褒め、素晴らしい回答はクラスで共有する。誤答はできるだけ放置しない。
 - ④必ず、生徒の名前を呼んで指名。(×「はい、その後ろの人!」)
 - ⑤机間指導中はノートやファイル類だけでなく、生徒の表情も観察する。
 - ⑥新出単語の予習を怠ったり、辞書をもっていないかたりする生徒は厳重注意(特に年度の初めに)する。
 - ⑦生徒から出された質問は、丁寧に回答する。
 - ⑧自分も勉強する。(今年度は片道100分の通勤時間、ありがたい…)
 - ⑨NHK ラジオ(英会話等)、英字新聞(デイリー・ヨミウリ)、放送大学、研修会等を活用し自己研鑽に努める。
 - ⑩小型メモ帳を常に持ち歩く。

申し訳ないことに、準備されていた膨大な資料のすべてを話していただいて皆さんと話合う時間は残念ながら取れなかった。しかしながら、「心構え 10 箇条」に見られるように、真摯に英語教育に情熱を傾けられる中西先生に、参加者は熱い元気をもらった。



授業の玉手箱

聞く力

夫 明美

ニュースによると、阿川佐和子さん著作の「聞く力」が100万部を超えるベストセラーになっているそうです。阿川さんは週刊誌で著名人のインタビュー記事を長年担当されており、最近では、テレビのインタビュー番組でもホステスをつとめておられます。そんな彼女のキャリアから学ぼうという方々が多いことを発行部数が物語っているように思われますが、本稿では、教室内外での教師と生徒との関わりという視点から「聞く力」を考えようと思います。

まず、授業運営者である教師側の視点に立つと、「教師の話をよく聞く学生」の振る舞いといえば、視線を合わせたり、うなずいたり、ノートをよくとる等の非言語的な側面が頭に浮かびます。また、教師側の話を最後まで聞いたうえで、質問や確認を行うという言語的な要素も含まれるのではないかと思います。対して、教師側が学生の話聞く場合はどうでしょうか？

私自身の短い経験を批判的に振り返ると、学生が言いたいことを言い終わらないうちに「分かったつもり」になってこちらが口を開いたり、学生が自分の言いたいことを自力でまとめようとしている途中に、こちら側が（勝手に）「あなたの言いたいのは、これこれということね。それについては、これこれという方法があるよ・・・」と、まとめたりする場面が少なからずあったように思います。教師が知識・知恵を伝達する側という役割に立つと的外れではないかもしれませんが、はたして学生側に「受け入れられた」、「自分の言いたいことに耳を傾けてくれた」という気持ちが生まれたかどうかについては、大きな疑問が残ります。沈黙をもって相手を待つ、というのも「聞く」姿勢の一つであるという意識が希薄であったためかと思えます。

このベストセラーのニュースから、会話というのは一方が口を開くまでに既に始まっている要素が多く、そこには上記したようなアイコンタクト、表情、姿勢、相手との距離といった非言語的な要素が多く含まれること、また沈黙も会話の大きな構成要素であることを再認識できました。

書籍紹介

『開国と英和辞書 一評伝・堀達之助』

堀孝彦 (2011)、巷の人、6,300円 412ページ

30数年前、修学旅行付添いで数度長崎を訪ね、本木庄左衛門が1814年に編纂した日本初の英和辞典『諸厄利亜語林大成』を目の当たりにして、英学事始に惹かれた。1808年、鎖国体制下の長崎に英国軍艦フェートン号の侵入を受けて、幕府が早急に作らせたものである。それから40年、1853年、黒船来航時に "I can speak Dutch." と第一声を発し黒船に向かっていった長崎和蘭通詞がいた。名を堀達之助という。この日本人に押さえ切れない感動を覚えた。達之助は英語通訳（翻訳）家として活躍し、日本初（1862年）の本格的な英和辞書『英和对訳袖珍辞書』（刊行部数200）を誕生させた。2年前発行の『ファミリー・メソッド』と併せて、堀達之助が序文を書いている。幕末に書かれた両序文が現在の日本にも通じる。『ファミリー・メソッド』（原文どおり）

The English language is so generally extensive, that almost all Nations speak it, and have books for learning it. Such a thing has given us an idea, to publish this small work for every body, beginning to learn the English. (後略)

HORI TATSUNOSKAY. YEDO, September 27th 1860. 『英和对訳袖珍辞書』（原文どおり）

As the study of the English language is now rapidly becoming general in our country we have had for sometime the desire to publish a "Pocket Dictionary of the English and Japanese languages" as an assistance to our scholars.

In the meantime we received an order to prepare such a Dictionary as soon as possible having in view how indispensable is the knowledge

so universally spoken to become rightly and fully acquainted with the manners, customs and relations of different parts of the world, and its daily important occurrences and changes. (後略)

HORI TATSUNOSKAY. YEDO, November 1862.

幕末に国家の最前線で異文化接触した驚愕の開国経験と苦難の生涯を丁寧に辿りながら、壮大なスケールで日本の近代の意味をも問いかける、堀達之助(1823～94)の傑作評伝である。(中井 弘一)

大阪女学院大学「教員免許状更新講習3」 平成24年度講習

平成25年3月9日(土) 9:10～16:40

<http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc/certificate>

「思考力・判断力・表現力」の育成をめざす指導 一」

・国際社会を読み解く英語力

—異文化理解の視点から時事素材を教材として—

東條 加寿子 大阪女学院大学 教授

・思考力を高める英語授業

—様々な thinking skills, project-based learning などを取り入れて—

中井 弘一 大阪女学院大学 教授

■ 講座のねらい

新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す知識基盤社会においては、異なる文化との共存や国際協力の必要性という理想の追求もさることながら、アイデアなどの知識そのものや人材をめぐる国際競争の加速化が一層激しいものになっている。その対策としての規制緩和や制度改革が進む競争社会において、自己の能力を発揮し社会に貢献するためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見だし、解決するための思考力・判断力・表現力等が必要であると文部科学省は我が国の教育の方向を打ち出している。

第一部「国際社会を読み解く英語力」では、グローバル化の進む国際社会で通用する「思考力・判断力」を養うためには、自文化の価値判断や思考回路から脱却した異文化理解の視点が必要であることを、時事英語素材を使って演習する。

第二部においては、英語の授業で「思考力・判断力・表現力」を育成する指導の構成要素は何か、その key competencies とは何かを探りながら、critical thinkingをはじめ様々な thinking skills や PBL などを用いた実際の教材展開例を考える。

■ 定員・対象

中学校英語科教員・高等学校英語科教員 計30名
(定員を超える場合は申し込み先着順にて締め切り)

■ 受講方法

○ 受講申し込み受付

平成25年1月15日(火)より2月22日(金)までに大阪女学院大学 教員養成センター「教員免許状更新講習」担当 ([ttc@wilmina.ac.jp](http://ttc.wilmina.ac.jp)) へお申し込みください。

○ 受講料 3,000円 (所定の口座へ振り込み)



編集後記

「教師とは子どもの成長を幸せに感じ、そのことで自らも成長できる専門家のことである」秋田喜代美氏の言葉は明日への授業の支え。

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher-Development Support Center

540-0004 大阪市中央区玉造2丁目26番54号

Tel: 06-6761-9371 Fax: 06-6761-9373

Homepage: <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc>

e-mail: ttc@wilmina.ac.jp